



孝經

下



文 研
911.33
Y31a
2



文学研究科
中村俊定
No. 65



荒野集卷之六

雑

年中行夏内十二句

供屠藕白散

荷今

いそげなやとそあやゆき人さす

春日祭

やーもいふまのなげははは

石清水臨時祭



背の青いところからかきとるの

灌佛

まゆめは白やいへんはあ佛を

端午

おち袖づく髪付は髪友は

施采

うらめくちとて採采は虫臭を

乞巧費

つのは采とくち七夕草とて

駒迎

爪髪も縁のすくちをい

撰出

まの地や足のおゆ

十月更衣

ましとあ衣うへんやうる

五公帛

舞姫に來りし指をねりし

追難

木を結りて腸をくくく鬼能面

詩題十六句

野水

今日不知誰計會

春風春水一時來

水ぬきし流る流るはまの風

白片落梅浮筒水

水多然もに付は梅白し

春來無伴雨遊少

花賣り又もたのあり隣り

花下忘帰因羨景

寂入なばもの川をせし留り

留春春不留春歸入

寂寞

しきもこゆる野もぬ

巖風吹袂衣

不寒復不熱

涼腕を松の葉にすくひて涼し

池晚蓮芳謝

蓮のまといひぬるるを

暑月貧家何処有客

來唯贈北窓風

涼をどく切ぬるるなり水のよそ

大座四時心惣苦就中斷腸是秋天

香の穠き秋の空

夜來風雨後秋氣飒然新

秋のぬき秋のぬき

鐘の響く初夜長

秋の星河欲曙天

残照燈用猶斜光月穿牖

残照燈用猶斜光月穿牖

獨り暮や泣くも白くする月の

一物秋霜能懷色

白くもやまあけつらむ心を秋のま

十月江南天气好

可憐冬景似春美

こがしともさくし息つくゆき

寂寞深村夜残し雪中

静かにさゆさくぬむしや雪のうき

白頭夜礼佛名経

佛名の礼く腰懐く白髪外

禱め能推ひのうけはしと

さすくしゆーわりのうき

鋸鏹目立

舟泉

かきほひの夕日くしむるつあ

付木実

五月園の鶯をよめる人の家

鉤瓶縄打

かへるはちやほのこころは秋の暎

糊賣

あふくまのきこねはむじむじ

馬糞楡

こかしの松やうらうら
つらつら

李夫人

槐在何許香煙引到焚處

いけはりの抱きまをのこころ

標貴妃

雲鬢半偏新妝覺花

冠不整下堂

あふくまのきこねはむじむじ

昭陽人

哉

小頭鞋履窄衣裳青々

黙眉と細長外人不見と應笑

たのあまのやちののまのほ
あま

西施

官中拾得娥眉芥不獻吾

君是愛君

さなすの極之極牡丹

王照君

玉貌風沙勝畫壺

このまよもよとぬのの柳か

一目留まをいしり侍

卯

釣雪

寂々の故也は佛供焼火く
おしり

辰

杜若さん繪書新来とほり

己

釋乃眠

午

あひとさき

未

蟬乃喜武家

申

五月而也

あつた

気

山

麻呂上

樹水

野鳥

野鳥

見

星

枝

合

海奥

おあしらの船引さるる盆の月 全

川奥

秋の昏暮川くの火ゆき小 合昭

牛馬四足是謂天落馬首奔奔

鼻是謂人

一方を極はく極は継才の部 被

藏舟於壑藏凶於澤謂之

固然而夜半有々刀者負

之而走

かゝる源走の市にらるるこい

絶聖棄知大盗乃止

七夕をわすれしともなまむし

鏡者大

あぬくく流るるものちをゆき 桂夕

鈍者壽

鶏以乃寄し一なるこゝろに 市山

藤原

ほしきほしき心むきなり 一井

師直

うきうき人まじりて 長駐

一休

あはれみのうらたへ 七月の雲 湍水

法然

あまのりはくしほのあまのり 嵐彈

凶岩

おろしやうらとせ敷く減る山岩の角 湍水

海岩

あふらふらふらおゆるるるら 全

曠野集卷之七

名所

いさよのすみ真まこ見ふ心竜回	松園
——真能骨や或る大江山	荷今
かゝ橋乃松を世と腕まこ	芭蕉
芝東一把うらうら切えり河波	湍水
嵯峨はくくちるる中あはぬ心盛	荷今

琵琶橋眺望



中々減る鬼獄とひまゆふとるる 合昭

空ろそとく夏もなぬるこころ 宗祇 法師

美濃國園より夏の日

物多き心もなぬる

寄野あつて布子着たり更衣 杜因

夏うつやゆめとあそぶ志願の こゝろ 童五

五月雨くかきぬめのやぬ回橋 芭蕉

湖乃みゆほりりき葉五月雨 去來

牛もほしき箱のあつたりぬる月雨 一髪

角回川

いこのほ紙ねほの能合ひく 教書 貞室

みづのうらいく秋と見の音 破笠

いさむいとほしきしなの物 芭蕉

夕月也杖とみなる角回川 越人

九月十三日

角回川と富士あつてそこの母心 素堂

鴨の宿やうらるる宿のうらるる宿田の 胡及

鴨の宿やうらるる宿のうらるる宿田の 剛支

武を祝 舞やうらるる宿のうらるる宿田の 舟泉

湖を宿 舞やうらるる宿のうらるる宿田の 尚白

かゝ宿 舞やうらるる宿のうらるる宿田の 随反

むまゝの也 ねあへとあまの日は 洗恩

そらとしと生 海風を舞や小の 俊似

みと池の宿 舞 舞やそのねと 一矢

宵に 富士を宿 舞 舞やうらるる宿田の 湍水

うらるる宿 舞 舞やうらるる宿田の 野水

星崎のや 舞 舞やうらるる宿田の 芭蕉

舞のゆや 舞 舞やうらるる宿田の 如行

旅

雲を 舞 舞やうらるる宿田の 芭蕉

大和 舞 舞やうらるる宿田の

花の 舞 舞やうらるる宿田の 全

楊岐里を離るるに西にたり 夕帆

日の入や舟をえとく行棹の心 一髪

のやぐりや添の音おせさるるな 荷与

雪の脱と後とたひぬ衣をく 芭蕉

あゝ人の後別と

いもいも涙あふくわさしく笑さり 除凡

寂つぬく倉熾の音やわゆやちん 冬松

数もさうすうらにあめり福ねん 昌徳

五月雨や柱月をおす市松家 松芳

夕らしとの矢名り一志ほあや 傘下

芭蕉きよの道家

稲妻あにさくさくつまのあやうり那 釣雪

なまのくさくさ秋の蟬 一井

あま風をうらむるわの舟水 野水

おのころきよきよの舟泉 舟泉

まかちゆきすうらば松をくあは 嵐弾

はししなほくさくさく

又級乃月ちこ二人さるはかり 荷今

越人孫らるるいさしき

月にし服はつきて馬乃うへ 野水

たつた川たつりつとる本男は 芭蕉

階乃首あはれは散り秋のいり 路通

将乃桶ららぬ其角はくさくさ

たつた

将乃桶に麻をかきと秋の山 荷今

と浦りく 稻をかきとあし ち京

入月こくちあしりさやわす 玄寮

能をけしきぬあしお徳う那 一井

石川よき人よきととと

澤庵乃臺をりの秋のそや 文鱗

草枕ふむきとあしりあまのま 芭蕉

旅あゆぬ力うさや村りた 常秀

洋書

あはれとて芭蕉の心ゆく

くさくさな水も神ははらひぬ 荷今

まよふそと 初瀬の縁乃入まきり 野水

其角のりいん

あはれとてあはれとてあはれとて 荷今

天竺の心ゆくあはれとてあはれとて 越人

うき世の心ゆくあはれとてあはれとて 傘下

里人の心ゆくあはれとてあはれとて 宗同

越人の心ゆくあはれとて

こころとてこころとてあはれとてあはれとて 芭蕉

旅とてあはれとてあはれとてあはれとて 司

述懐

舟の心をあはれとてあはれとて

こころとてあはれとてあはれとてあはれとて 路通

子を獨守りてあはれとてあはれとてあはれとて 収宣

余心の心ゆくあはれとてあはれとてあはれとて 落梧

高野まて

あまよなたまきぬり奥の院 杜四

梅くらくしあつりこも食は 梅吉

高野まて

又あのをきくはきく 雑子の色 芭蕉

あまきとよおきくそのついでに 荷子

かきふ入湯をまひひかり 一盤 同

一本のなましとあまきく伝おのり 杏雨

肩交るる屋あまきくゆをせまの夏 秋風

ゆるしや白髪あまきく屋あまきく 亀洞

九月十日まふまきのまきく

あつれあまきくまきくの仲まきく 嵐雪

あまきくまきくの仲まきく 暁語

あまきくまきく

あまきくまきくあまきくまきく 芭蕉

あまきくまきく

二かゝりのあまのりくやあまのりく
社園

鎌倉建長寺よまゝうゝ

あまのりくあまのりくあまのりく
越人

あまのりくあまのりくあまのりく

あまのりくあまのりくあまのりく

あまのりくあまのりくあまのりく
荷子

あまのりくあまのりくあまのりく

あまのりくあまのりくあまのりく
嵐彈

櫛の次り 穀子足さす 尾わす
去來

目や遠く 身やちのり
西武

あまのりくあまのりくあまのりく
芭蕉

あまのりくあまのりくあまのりく
除風

あまのりくあまのりくあまのりく

あまのりくあまのりくあまのりく
越人

意

伊勢

あまのりくあまのりくあまのりく
一有妻

玉奴くや余のこころを時を
 除風
 数夜おくく空のちをこころを
 長虹
 むしり乃月くく我をこころを
 文淵
 虫に小神をこころを女り那
 冬文
 さくひめく妹の垣をこころを
 心棘

六宮務代集無類色

宇月周の福書あつた月影
 長虹
 一かへく人ほのぬをこころを
 尚白

さいまわ

山田くくあつた月影
 尚白
 志るあつた月影
 小春
 妻のあつた月影
 越人
 松の中あつた月影
 俊似
 物おもひあつた月影
 舟泉
 くらねくあつた月影
 嵐集
 山田くくあつた月影
 松芳

三つ〜
わらわ〜
昌碧

奥常

末期

〜
守武

〜

〜
傘下

末期

〜
丸順

〜

橋乃〜
荷今

〜

〜
京
去来

〜

〜
荷今

せむやとくく妻のあはれゆき

水ぎ月の相のつゝあせりゆくし

野水

辞也

あまゆや灯籠一川のまよ

子こそをくはるるは

何れ親のあはれをゆくし一確り

落梧

一原野のて

なごもあやい所ちのあはれ

釣雪

妻の遊善

あまゆや一ちの里人うたのむ 自悦

孝子ト妻乃こまうりし

あま

あまゆやあはれゆくし 玄来

コトをさうりし

その人もあはれゆくし 秋の沈 具角

あまゆやあはれゆくし

松風子や雪り合々ふ秋の香 尚白

ある人の追善

煙火もさゆやたのみこひ意のこもや 芭蕉

旅よてみまかりも何人

あは雪の如きそらもくらしの清なり 嵐弾

さる山野へくさやこひ俳のまは 加賀 小春

曠野集卷之八

釋教

伊勢

神垣也たぬらもくはに涅槃像 芭蕉

負とまるぬたはしきりぬきま 嵐弾

西行上人五百歳

さる川にさしよのゆる梅の肌 荷今

たけり 遠

連翹やそゆと目やし志ほゆりり 胡及

うす青く竹の葉くは二玉か 松茸

木履くく信もふきり雨乃花 杜酒

けりこいひとこゆて勢くは花のき 冬松

花之酒信とも俺ん場とこのか 其角

貞享つらせ八辰の歳深生月東照宮の別當
僧正の成房に慈惠大師近座執事法華
八講の信也(是)と云ふも成徳園より一
序品のころうか

散る花のこもむしーーーの 越人

女三扇の徳平と云ふと云ふ川巻堂成徳園の信也

あつ龍女成徳園の信也と云ふと云ふ信也

鼻かむきのーーと云ふ

ほろくーとあつあつとやんぬの 同

靉々青は尾上のとろくはまきり 俊似

古寺やほらとめつひの萱草 一井

八雲のうし

海をみよめあつあつとむやうひ 千周

伊藤

咲よかりふるんあまふ紅牡丹 一井

復山や木陰くの江湖初を 莖葉

みあらし

作佛乃月くせし世もふ麻の子か 芭蕉
権佛のそ出流し ちうきん

さるけりて

腰のあゆまに礼参るる子けり山か 一雪

舟くまて、養つ日の流るるか ^{加賀}一笑

十如是

松あゆまのありけりく通る

しん

荷

昂身昂佛

復隆乃るる疾をちんの佛小 愚益

ほろひや後の縁なる衣 崩彈

たのむや門もくあるく施餓鬼棚 荷兮

おろきおちばともむしのめいこ 探丸

石籠と絶縁鬼の棚のくすまか 文里

規糸舟より酒をも向きり 亀洞

たきぬつと送あかぬあせり 卜枝

梅待みよ〜らんこらん松乃陰 釣雪

平木施一切

梅待こも〜らんこらん松乃陰 後似

梅書〜〜大佛おのむゆ井市 荷兮

垣越〜引導守敵〜こもゆ少 上枝

あ〜人四時の曇柳なかりとて水鏡也

熱〜も石食不厨〜もい〜を感〜

系と居〜と〜

后〜〜ぬら〜〜な〜〜ハぬら 荷兮

あ〜もの奥の〜

燕〜法寺乃 鼓〜〜〜 其角

進〜〜〜〜〜主枝〜〜〜月舟 一井

我の子〜本御〜〜〜〜〜 上枝

人のわがたあ〜〜〜〜〜

〜〜〜〜〜

衣〜〜〜〜〜〜〜〜〜一時雨 嵐彈

鎌倉の西園倫寺〜〜

た〜〜〜の流や直〜〜〜〜 越人

古寺の香

暖や伽藍くの雪見廻ひ 荷今

同

雪ややうと一玉り斤腕 俊似

つらりるこハされもる雪ら 一井

然る疾する人のこハりやれ鼓 文洞

千觀る馬とかせりしのり 其角

薬五品七句

三
馬
荷
や

如寒者得火

お川白くむの後ら 胡及

如裸者得衣

雪乃日の内様指ふある家

如商人得主

お六乃あひてふいこむいふいふ

如子得母

竹もくをけと丸つくさけの肌

如後得船

月影比隣の板木さうなかり

如病得醫

かしくよまの清みこはあじまの心

如暗得燈

秋のよめおちしゆまのまゝにたの

神祇

古きや否きききしる獅子頭

釣雪

二月廿五日を神

おとさしきや廿四日の月影梅

荷今

まんと梅はぬくく庭火分

同

あつともあひここく神の梅

亀洞

上下のさしぬやうく津の梅

昌碧

灯のかすみのなかり梅の中

釣雪

何れも〜枝の如く〜梅の如く 越人

是く似くある梅も〜梅の梅 舟泉

月代も志も〜梅の如く 雨桐

門あつて梅も〜梅の如く 重五

浮鳥も〜梅人の如く〜梅 玄案

若くも事〜齒牙か〜梅 鈍可

宮乃後川後〜梅の如く〜梅 李桃

此手彼の末能〜梅の中の如く〜梅 好葉

ほろ〜梅の如く〜梅の如く 玄案

まぢ能〜梅の如く〜梅の如く 亀洞

破扇〜梅の如く〜梅の如く 未学

川奈〜梅の如く〜梅の如く 荷今

こかりしや〜梅の如く〜梅の如く 尚白

世月能〜梅の如く〜梅の如く 松芳

あ〜梅の如く〜梅の如く 落格

若宮奉納

ましきくもあまの妙也神々系
 跡の方也な疾もあすの跡系
 能麻川若明の旅々神系
 かつきこの神もあすの庭火か
 橋杭や内後るも煤もあす
 利重
 野水
 昌碧
 村俊
 卜枝

祝

肩付もあすのあまの妙也神々系
 冬文

荷字もあすのあまの妙也神々系

貴まもあすのあまの妙也神々系
 君もあすのあまの妙也神々系
 青苔もあすのあまの妙也神々系
 いとあすのあまの妙也神々系
 あすのあまの妙也神々系
 先後へあすのあまの妙也神々系
 芭蕉



